

I サムエル 28 章「主のことばがない中で」

新年の初めの主日に、主の御前に共に集い、礼拝を献げることができ感謝します。今日も共に主のみことばを聞くことができ感謝します。妨げとなるものがあるなら、取り除いていただき、心を開いて、主の御声を聞くことができるように願います。

1. ダビデの窮地 (: 1~2)

ダビデはペリシテ人の地に逃れるほかに道はないと判断し、600 人の部下とその家族と共にガテに行きました。ガテの王アキシュの信用を得るために、ダビデはペリシテとイスラエルの共通の敵を襲撃し、アキシュには偽って報告し、ユダの人々やユダに友好的な人々を襲撃したと報告していました。アキシュはダビデの報告を聞き、信用していました。

「そのころ」、ペリシテ人が再びイスラエルと戦おうとして、軍隊を招集しました。ダビデが恐れていた時が来ました。アキシュの傭兵となっているのですから、当然一緒に出陣しなければなりません。しかし、ダビデと部下たちがイスラエルと戦えるわけがありません。二人の対話の緊張した様子を伝えています。ダビデの答えは曖昧です。アキシュはダビデを信用していました(27:12)ので、「では、あなたをいつまでも、私の護衛に任命しておこう」と言います。

こうしてその場は守られました。ダビデは依然として窮地に立たされています。アキシュに従ってイスラエルとの戦いに出て行ったら、どう行動すれば良いのでしょうか。ダビデがアキシュを欺いてきた結果です。

2. サウルの悪あがき (: 3~19)

その一方でイスラエルのサウル王はどのような状況だったのでしょうか。ペリシテ軍が進軍して来て、イズレエルの平原の北部シュネムに陣を敷きました。それに対してサウルも兵を集め、イズレエルの平原の南にあるギルボア山に陣を敷きました。

5 節。かつては勇敢な戦士であったサウルが、ペリシテ人の陣営を見て恐れています。そして、主に伺いました。夢、ウリム、預言者によって主に伺うことは正当な手段です。しかし、主はどのような手段によってもお答えになりませんでした。サウルは精神的に追い詰められます。

それでサウルは霊媒に頼ろうとします。3 節。霊媒や口寄せは律法で禁じられ、主が忌み嫌われるものです(申命記 18:9~12)。異教の民の間では広く行われており、イスラエルの中にも入り込んでいたのです。しかし、聖書だけはそれらを禁じています。それらは偶像礼拝と関係があり、悪霊と関わることになるからです。

サウルは家来たちに霊媒をする女を探させます。すると、エン・ドルにいることが分かります。それでサウルは変装して、部下を二人だけ連れて、その女のところに行きます。警戒している女にサウルは「このことにより、あなたが咎を負うことは決してない」と誓います。それで女が承知すると、「サムエルを呼び出してもらいたい」と求めます。そこで女は霊を呼び出すことを始めました。

すると、女が大声で叫びました。サムエルの霊を見たというのです。彼女が叫んだ理由は、一つには、霊を呼び出すことを求めた人物がサウルだと分かったからです。自分が殺されるのではないかと恐れたのです。どうして彼女にサウルだと分かったのかは書かれていませんが、おそらくサムエルの霊がサウルの名前を呼んだのでしょう。

彼女が恐れて叫んだ理由は、もう一つには、彼女がこれまで行ってきた霊媒の状況と、今回サムエルの霊を見せられた状況がまったく違って、自分で制御できない初めて経験することが起こっていたからではないかと思われれます。

サウルが「何を見たのか」と尋ねると、女は「年老いた方が上って来られます。外套を着ておられます」と言います。それを聞いたサウルは彼女が見ているのはサムエルだと分かって、地にひれ伏しました。おそらく外套を着ているということがサムエルの特徴的なことだったのでしょう。

その後、女を通してサウルはサムエルの霊と対話することができます。不思議な出来事です。聖書で禁じられている霊媒のことが聖書に記されていることをどのように理解したら良いのでしょうか。

これは主がなさった特別のみわざでした。通常の霊媒は、まことの神、主とは何の関係もありません。むしろ、悪霊のみわざであり、主に忌み嫌われることです。人が死者の霊を呼び出し、対話することはできません。しかし、この時は主がこの霊媒をする女を用い、サウルに対してみわざを行われたのです。

そのように考えられる理由の一つは、先ほど言いましたように女が叫んだのは、この時の状況が自分で制御できない初

めての経験だったからと考えられることです。

そして、もう一つの理由は、ここでサムエルの霊が語っている内容です。それが主のみわざであると考えられる大きな理由です。サウルが神の答えがなくて困りきっていると言うのに対して、サムエルは言います。16～18節。ここで語られていることは、サムエルが生前に語っていたことと同じです。サウルが主の御声に聞き従わず、アマレクを聖絶せず、主を退けたので、主もサウルを王位から退けたのです。そして、今後のことも語られます。19節。このことばが確かに主のみこころであることは、このことば通りに実現することで分かります。31章に記されています。

また、16節から19節のサムエルのことばの中に、「主」が7回使われています。このことばが真実な主のことばの預言であることを示しています。悪霊がこのような預言や真実なことばを伝えることはありません。

以上のように考えられるので、この時サムエルの霊によって語られたことは主のみわざであったのです。

ただし、このようなことが聖書に書かれているからといって、霊媒を行って良いものではありませんし、死者の霊を呼び出そうとして良いものではありません。繰り返しますが、ここに記されている出来事は主が特別になさったみわざです。神、主ははっきりと霊媒や口寄せなどを禁じています。それらは悪霊のわざであり、その内容は真実ではなく人を欺くものですから、決して関わってはならないのです。

3. サウルの恐れ (:20～25)

サウルは、イスラエルがペリシテに敗れ、明日、自分と息子たちが死ぬことになるかと聞くと、その場に倒れて、おびえました。また、彼は一昼夜、何も食べていなかったため、力が出ず、立ち上がれませんでした。

サウルが断食をしていたというのは、おそらく霊媒によってサムエルを呼び出してもらうために備えていたのでしょう。そのために宗教的な行動として断食したのでしょう。彼はすでに主に退けられていたのですが、そういう点では信心深い人でした。しかし、私たちにとって大事なことは、信心深い行動を行うかどうかではなく、主のみこころを知り、それに従って行動することです。

サウルは自分が国から追い出していた霊媒に頼りましたが、何の役にも立ちませんでした。主のことばは以前と変わらず、それを覚えることはできませんでした。サウルに主の答えがなかったのは、主が語られているときにサウルが聞き従わなかったからです。

主のことばに聞き従わず、主を退けてしまうなら、いのちを失うことになります。この警告を受け止める必要があります。逆に言えば、主のみことばによって私たちはいのちを得ることができ、生かされていくのです。

霊媒を終えた女がサウルを見ると、倒れて、力が失せ、非常におびえているので、彼女はあわれみ、「食事をして、元気を出してください」と言って、急いで食事を用意しました。サウルは「食べたくない」と言っていました。家来も女もしきりに勧めたので、出されたものを食べて、その夜のうちに立ち去りました。

女のあわれみによってサウルは一時的に支えられます。また、霊媒に頼るという間違った方法でしたが、そこに主が働いて、主がなさることを知らせたことは、サウルに対する主のあわれみだったように思います。

しかし、私たちにはもっと大きな主のあわれみが与えられています。イエス・キリストによる罪からの救いです。みことばに聞き従わずに罪を犯してしまったとしても、悔い改めて主に立ち返り、罪を告白してキリストの十字架を仰ぐなら、「神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます」(Iヨハネ1:9)。ですから、機会が与えられているうちに悔い改めましょう。「わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい」(黙示録3:19)。

この箇所から教えられるように、私たちは主のことばを聞き続けていられるように願います。主のことばが語られているときに、聞き従うことができるように祈りましょう。

また、主のみこころを求めるときに、何か不思議な出来事によって示されるのではないかと求めることはやめましょう。変わることはない主のみことばに聞いていきましょう。礼拝で聞きみことば、日々継続して聞きみことばによって確かに主は語ってくださいます。私たちの心にみことばによって語りかけてくださいます。そして、そのみことばに聞き従いましょう。

主のことばを退け、主を退けることは、いのちを失うことです。みことばによってこそ私たちはいのちを得ることができ、生きることができるのです。悔い改めて主に立ち返り、みことばに聞き続けましょう。